



NEWSLETTER

赤十字国際委員会ニュースレター

【目次】

コラム・世界の現場から	1
特集：南スーダンでのミッションを終えて	2
日本とICRCの関わり	3
赤十字の輪・駐日事務所通信	4



ヴィンセント・ニコ
赤十字国際委員会 (ICRC)
駐日事務所 代表

私はこれまで32年間、ICRC国際救援職員として、アジアとアフリカの20以上の紛争地や武力が行使されている現場で人道支援活動に携わってきました。

初任地は、カンボジアとの国境に位置するタイの小さな町でした。カンボジアの紛争から逃れてきた何万もの人々が暮らす難民キャンプで、赤十字は食料配付や医療活動を行っており、私はそこでICRCを含む人道支援組織とカンボジア・タイ当局間の連絡調整を担当していました。実はその時共に働いていたメンバーの中に、日本赤十字社から派遣されていた職員も多数いたのです。初任地と、おそらく最後となる現在の赴任地において、魅力的な「日出ずる国」の人々と共に仕事ができることは、何と嬉しいめぐり合わせでしょう。

タイで活動した後は、フィリピン、スーダン（北部および南部）、エチオピア、モザンビーク、アンゴラ、南アフリカ、ザイール（現コンゴ民主共和国）で、戦闘の被害にあった人々の保護と支援に携わりました。また、ケニア、インド、インドネシアでは、地域代表部首席代表として近隣諸国を含む現場の活動を指揮しました。

32年間、世界の戦いの形が大きく変容する様子を目の当たりにしてきました。かつて紛争の背景には冷戦がありましたが、近年は、民族・部族・宗教的要因、あるいは資源不足や犯罪行為などに起因した地域特有の争いが数多く見られます。こうした事態はニジェールやマリ、シリア、イエメン、南スーダンなど、様々な国・地域に及びました。しかしたとえ安全が確保されていない地域であっても、私たちは状況を迅速に把握し、戦闘による被害を受けた人々のニーズに合わせて適切に活動を展開しなければなりません。そのためにも、現場の状況を一番理解している現地事務所が担う役割はますます重要性を増しています。

経済・政治両面においてアジアの国々が台頭する中、日本にはけん引役として世界中から期待が寄せられています。その日本において、前任の長嶺は、駐日事務所をゼロから立ち上げ、方向性を決め、日本政府やその他多くの組織と友好な関係を築いてきました。この3年半の間に、邦人職員数、日本政府からの財政支援ともに3倍以上に増加しました。二国間及び多国間外交面においても、日本は大きな影響力を持つ国です。私の使命は、この日本とICRCの関係をさらに深め、強化することです。これまで駐日事務所は地域代表部管轄下に置かれていましたが、7月より新たにジュネーブ直轄となり、英語表記もOfficeからMissionに変わりました。これも、日本に対するICRCの期待の表れと言えるでしょう。

世界の争いや紛争の被害を受ける人々を想い支援する気持ちが、日出ずる国でさらに広まり、悲惨な状況に苦しむ人々への希望の光となるよう、皆様のご支援を受けながら邁進していきたいと思えます。

写真：国際人道法の基本的ルールを武装集団のリーダーたちに伝える（3月30日、マリ北部ガオ州）

世界の現場から

シリア

シリア赤新月社とともに、6月中旬からの1ヶ月間に国内避難民と受け入れ先自治体の住民15万人に食料を配付。医療施設に医薬品や物資の提供も行っている。2011年半ば以降、赤十字の支援を受けた人の数は60万人に達した。

ガザ

7月16日、ICRCの支援を受け、イスラエル Ramon 刑務所の被拘束者をパレスチナのガザに住む家族が訪問。5年ぶりの再会を果たした。イスラエル当局が被拘束者と家族の面会を停止した2007年以降、ICRCは当局に対し面会再開を要請していた。

マリ

北部では、武力衝突と食糧危機により、依然多くの人々が厳しい状況に置かれている。武力衝突が激化した4月上旬以降ICRCは活動を一時停止していたが、7月14日より再開。今後、食料・種の配付や弱った家畜の買い取りなど支援の内容・対象地域ともに拡大していく予定。

コロンビア

7月中旬に南西部で起きた反政府勢力と政府軍の武力衝突により、多くの家屋や公共施設が破壊された。ICRCはコロンビア赤十字社と協力し、被害を受けた約1,500人を対象に、食料の配付や建物の修繕などを行っている。

最新情報は公式ツイッター
@icrc_tokからも配信



ICRC

特集 南スーダンでのミッションを終えて

眞壁仁美

赤十字国際委員会 駐日事務所
広報担当官

今年の2月1日より約3ヶ月間、フィールド国際要員として南スーダンに短期赴任しました。隣国スーダンとの関係が日々緊迫していく中での人道支援。ICRCの現場では専門分野を持つ職員が多い中、私の場合は短期間ということもあり、人手の足りないプロジェクトや人道ニーズが高まる地域に派遣され、国中を移動しながらの活動となりました。

生活の自立支援

武力衝突による治安悪化により国内避難民となった人や、かつて国内避難民だった人々に対して、ICRCは農具や種を無料で提供しています。2月上旬から二週間は南西部で約3,500世帯に、また帰属を巡ってスーダンと係争中のアビエイ地区周辺では3月末～4月上旬にかけて約2,500世帯に対して配布活動を行いました。農具はクワやシャベル、オノ、種はナス、トマト、玉ネギ、落花生、トウモロコシ、そして農作業をするための食料（トウモロコシ、豆、塩、砂糖、食用油）を、事前に登録を済ませた人々にチケットと引き換えに渡します。

登録から配付まで、常に南スーダン赤十字社のボランティアと一緒に。寝起きも共にし、公私の時間を共有するため、団結は日毎に深まります。夕食は、品薄な市場で材料を買い込み、女性陣が自慢の腕を振るってくれます。大抵、肉（牛や鶏、何かの野生動物？）を煮込んだものに、キャッサバ（酸味の利いたマッシュポテトのような主食）。話題はもっぱら、大家族で困窮する台所事情や将来の夢でした。

家畜へのワクチン接種

南スーダンの人々にとって、家畜、特に牛はかけがえのない財産です。私たちは自立支援の一環として、農務省や国境なき獣医師団と共に、北部で1ヶ月半、ワクチン接種キャンペーンを行いました。対象となるのは、10万頭近くの牛と、約1万頭の羊・ヤギ。放牧の時期だったため、早朝大量の牛がひしめき合うキャンプに出掛け、牧草地に向かう昼前に、逃げる牛を捕まえて一頭一頭に注射を打ちます。一連の作業をするのは、事前に訓練を受けた地元住民20人。ワク



タイヤの跡を外れないよう地雷原のドライブは命がけ（ジョングレイ州北部）



同僚と一緒に国内避難民のニーズ調査をした時の一枚。後ろに見える藁の建物で避難民の仮の住まい（上ナイル州マベック）

チンの恩恵を受けるコミュニティが主体的に参加することで、支援を「受け身」の立場としてでなく、自立を目指した第一歩と捉えてもらうことが狙いです。

離散家族の再会・連絡回復

紛争や部族間の暴力の応酬などで離れ離れになった家族に、赤十字通信を41通届けました。国内外に散らばる家族から寄せられたメッセージを、宛名の人物の行方を突き止めて、本人に手渡します。私たちは配達と同時に、行方不明になった人の追跡調査依頼も受け付けました。最後に見かけたのはいつ、どこだったのか、その後消息に関する噂などを耳にしたことがないかなど、家族や友人、隣人から知りうる限りの情報を聞き取ります。

ICRCの追跡調査により、2005年、一人の男性が23年ぶりに母親と感動の再会を果たしました。離れ離れになった当時まだ少年だった彼は立派な男性に成長し、以前の面影はほとんど残っていません。再会当日、母親は遠くから歩いてくる彼の姿が目に入るや号泣。笑顔で近づいてくる我が子の歯並びを見て、即座に息子だと確信したといいます。「ICRCに恩返ししたい」と私に語ってくれたその男性は、今、北西部ワウにあるICRC副代表部の人事担当として現場の活動を支えています。

危険と隣り合い、命と向き合った日々

一番苦労したのは移動でした。全ての活動は、点にする村を移動して行われます。道なき道を大量の物資を積んだ大型トラックと共に移動するため、道すがら周辺の住民の助けを借りて、オノで木を切り倒し、枝を刈りつつ進んだこともありました。また、地雷原を轍に沿って片道四時間半かけて進み、赤十字通信を届けたことも強烈な思い出として残っています。大破して路肩に放置された車に、道中の恐怖がさらに

煽られました。任務の後半はスーダンとの国境沿いで活動することが多く、両国の軍事的緊張が高まるにつれて移動制限もかかりました。実際、空爆された地域とそう離れていない所に活動拠点が置かれていました。それ以外にも、蜂の大群に急襲されたり、毒蛇やサソリ、マラリアなどの危険と隣り合わせの生活は、刺激的以上の経験でした。私はこれまで駐日事務所の広報として、「紛争の最前線で人々に寄り添い、命と尊厳を守るのがICRC」と伝えてきましたが、暴力の犠牲となった人々たちを支援・保護する前に、まず自分たちの命と向き合わなければならない現実を思い知らされました。30年以上続いた紛争は、負の遺産として南スーダンの人々に暗い影を落としています。電気も水も、日々の食料すら欠いている現状に加え、教育の機会や医療の水準もはるかに乏しい現実。支援する側も、支援を必要とする側も、過酷な生活環境に身を置きながら日々闘っています。

日本に帰国する直前、南スーダン当局に拘束されていたスーダン人13人が釈放されました。スーダンと一触即発状態に陥った4月上旬、当局から初めて収容所訪問の許可が下り、ICRCは全員を訪ねて処遇を確認、家族へのメッセージも預かりました。その後エジプト経由で母国への帰還をサポート。帰りの飛行機を待つ彼らの笑顔は今でも忘れられません。決して平坦ではなかった南スーダンでの3ヶ月の道のりでしたが、ICRCで働く醍醐味を実感した瞬間でした。



アビエイ近郊で南スーダン軍に人道法を説明する同僚

2012年7月9日に独立から一周年を迎えた南スーダンの現状をウェブ上で特集しています。記事は駐日事務所ウェブサイトや、映像は本部のICRC Video Newsroom (www.icrcvideonewsroom.org) をご覧ください。

— 日本とICRCの関係を歴史をひもとくシリーズでお伝えします —

3

赤十字の輪

義肢製作を通して 「いのちの尊厳」を具現化

日本赤十字社（日赤）唯一の義肢製作所が千葉にあることをご存知ですか？所長の小林恵司さんにお話を伺ってきました。

Q：60年の歴史があるそうですね

1952年、身体障害者福祉法に基づき、千葉県初の補装具製作・修理施設として開設されました。当時千葉県にも戦争によって負傷の方が多数いたため、開設は大変喜ばれたそうです。業務内容は時代や社会の移り変わりに伴い変化し、近年は交通事故や成人病による四肢欠損などに対応した義肢・補装具製作が中心になっています。

Q：訪問サービスもあると伺いました

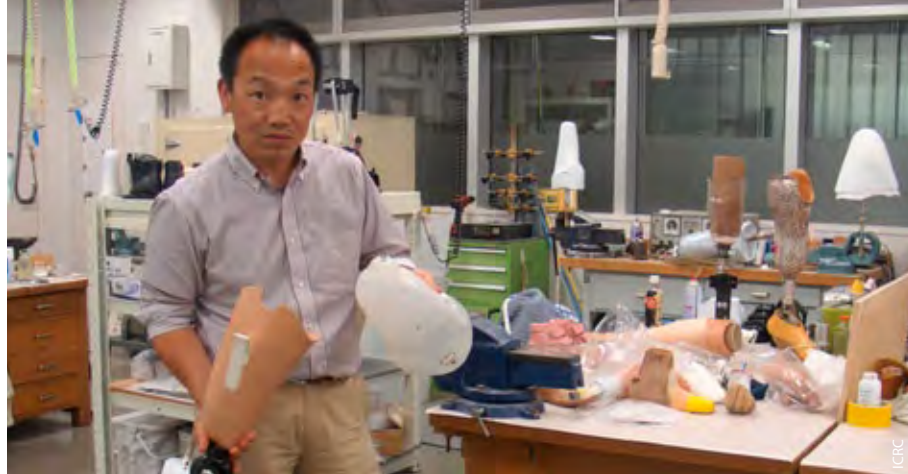
来所困難な方が多いため、私を含め4人の義肢装具士が主に使用者のご自宅を訪問して、製作・修理を行っています。微細な調整で使い心地が大きく変わるため、使用者の言葉に耳を傾け改善を心がける日々です。

日本赤十字社千葉県支部 義肢製作所

住所：千葉市中央区千葉港5-7（千葉県支部1階） 電話：043-241-7535

URL：http://www.chiba.jrc.or.jp/work/w-welfare.php

※見学も随時受け付けています。希望される方は事前にお問い合わせ下さい。



所内を案内する小林さん。依頼者がサンプルを見て検討できるよう、様々な装具を備えている

Q：心のケアにもつながりますね

体に障害があると、イライラしたり、気持ちが悪くなったりします。義肢製作を通して使用者の「いのちの尊厳」を具現化し、少しでも皆さんが暮らしやすくなるよう、お手伝いしていきたいと考えています。

Q：小林さんはICRCの義肢センターで活動されたこともあるそうですね

1995年から96年にかけて約3ヶ月間、カンボジア西部のバタンバンに赴任していました。地雷被害者を対象にした義肢センターで、現地スタッフや

ICRCの技師たちと共に活動しました。よく、技術指導をしてきたと思われるのですが、むしろ学ぶことの方が多かったですね。高性能で高価な部品よりも、修理が容易で低コストな物を使うなど、使用者のニーズを考えて最適な選択をする姿勢は日本でも大切にしています。



鮮やかな手さばきで行われる義足の型取りに、見学に来ていた高校生の視線も釘付け

駐日事務所 通信

離任のご挨拶 —前所長・長嶺義宣—



3年半にわたる任務を終え、とうとう代表交代の時がやってきました。60年ぶりに駐日事務所を立ち上げるにあたり、多くの方々にお世話になりました。改めて御礼申し上げます。

当初、紛争と縁のない国において、ICRCの活動を幅広く知ってもらうことには無理があるように思えました。しかし、脅威のもとが自然災害であろうと紛争であろうと、人を助けることを志す多くの方が、私たちの任務に共鳴してくださることに気がきました。そして、共に人道支援に対する理解を深めていき、具体的な関与のかたちを様々な機会に紹介できたことは大変喜ばしいことでした。「平和国家」日本がどのように戦闘や自然災害の犠牲となっている

人々に救いの手を差し伸べることができるのか、近年議論が活発になってきているように感じます。

所長に着任した際、邦人職員数は僅か5人。増員が最優先課題だということを痛感しました。積極的に採用活動に取り組んだ結果、職員数は約3倍に伸びましたが、それでも今なお日本において人道支援活動は、専門知識を必要とする「プロの仕事」として定着していない気がします。議論が活発に行われている一方で、実際に人道支援をキャリアにすることに躊躇する人が多いという印象は拭えません。

よく、現場において必要とされる知識と経験について聞かれます。ICRCが職員を採用する際には、今まで何を勉強してきたかではなく、目の前に立ちはだかる問題に対していかに対応できるかを重視します。課題が次から次へと降りかかってくる中、いかに状況を分析し、限られた時間の中で対策を考え、共通の目標に向けてチームを団結させられるか。またいかに柔軟に軌道修正できるか。それが救援活動の成功を左右します。

次世代を担う人にはこれから、目の前の課題に臨機応変に対応していく能力が様々な局面において必要とされるでしょう。常に臨場感を忘れずに。この国の将来を背負って立つ方々への私からのエールです。

アニメ「ジュノー」 テレビ放送決定！

第二次世界大戦末期、ICRCの駐日首席代表として日本に派遣されたスイス人医師、マルセル・ジュノー。広島への原爆投下から3日後に日本に降り立った彼は、その惨状を知り、GHQに支援を要請。粘り強い交渉により15トンの医薬品と医療資機材の提供を取り付けました。自らも広島へ赴き、負傷した人々の治療にあたったジュノーは、「ヒロシマの恩人」とも呼ばれています。

彼の生涯を描いたアニメ「ジュノー」（配給：アニメ・ジュノー制作委員会）が、この度NHKのEテレで全国放送されることになりました。タイムスリップした二人の女子中学生がジュノーの生涯を追うなかで、彼の献身的な活動の根底にある「愛」と「勇気」をつかむ物語。是非ご覧ください。

「ジュノー」テレビ放送日程

8月6日（月）午前9時00分～10時05分 NHK Eテレ



赤十字国際委員会 駐日事務所

〒105-0001

東京都港区虎ノ門5-13-1 虎ノ門40MTビル6階

TEL：03-6459-0750／FAX：03-6459-0751

日本語ウェブサイト：http://www.jrc.or.jp/ICRC/

ICRC